

ジブ

昔、日光市の^{くりやま ち いき}栗山地域では、^{かんたん}簡単に物が手に入らなかったため、着物がすり切れてもすぐ捨てず、他の古くて着られなくなった衣服の一部を切り取って、あて布としてぬい合わせることで、最後まで大切に使い続けました。

そのことをくり返していくうち、たくさんのつぎ当て^{も よう}が模様のようなになった着物を「ジブ」といいます。

^{くりやま ち いき ゆ にしがわ}〈栗山地域の湯西川に伝わる「ジブ」〉



(画像 小山市立博物館第 71 回企画展図録より)

これは、そでの形が“モジリスッポ”とよばれる、男性が冬の仕事着として着ていた「ジブ」です。そで口が小さいので温かく、かつ、たもとが三角に折り曲がっているため、じゃまになりません。寒い冬、家の中で座り続けて仕事をする時に使っていたため、何枚も布を重ねたり丈を長くしたりしていました。

もとの布地が分からないくらいたくさんの小さな布でつぎ当てがされ、物を粗末にせず、大切にしようとする心が表れています。

〈“栗山”ってどんなところ?〉

江戸時代、栗山は、湯西川・^{かわまた のかど}川俣・野門・^{どうぶ くるべ ひがけ ひなた}上栗山・土呂部・黒部・日蔭・日向・西川の九つの村からなっており、「栗山郷」といわれました。

高い山に囲まれ、冬は厳しい寒さや深い雪のため、他の町や村との行き来は大変でした。

そのため、生活の仕方やことばにも、それぞれの村ならではの形があったといわれています。

～とちぎ^{じん}人の想い～

栗山地域の日向の『ジブ』には、女性が^{ふだん ぎ}普段着として使うものがありました。すり切れた部分に、^{あさ も よう ししゅう}麻の葉模様の刺繍をしたり、自分の好みの布をあて布に使ったりして、おしゃれを楽しむ気持ちも忘れませんでした。

^{さいたくかい ごし えん しせつ}〈在宅介護支援施設ひだまり

(日向地区)の皆さんより〉